
It's nice to meet you **R**everse **W**orld!

御伏四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

It's nice to meet you Reverse World!

【Nコード】

N8114Y

【作者名】

御伏四

【あらすじ】

これはパタポン3のキャラクター、“ダークヒーロー”の物語です。パタポンの世界観ながら全く違う物語。はじめまして、リバーワールドに。

擬人化、一部女体化、設定変更注意です！それでもOKな方どうぞ。

巻（前書き）

遠吠えに怯えろ！

巻

昔々の話。

一人の若者は豪族の首領の言葉に唆され、大きな大きな卵を割ってしまいました。その卵は世界そのものの、割られたそれは幾多の破片、パラレルワールドを作り出しました。世界は薄切りにされ、散り散りに別れてしまいました。これはそんな世界の一つ。行き詰まってしまった世界の一つ。闇が生まれ、闇が育ち、闇が殖えたそんな世界。

これより物語の一幕が始まる。

『グツグガアアアアアア！！！』

茶の狼の遠吠えによって。

「……………」

とある大陸の原野の一角、真つ暗な洞窟の地下に足を引きずる音が響く。

一人の青年がいた。ボサボサに生やした茶髪、赤くギラついた瞳、細身だが確りとついた筋肉、毛皮を羽織り腰蓑を巻いた蛮族のような出で立ち、鼻の頭に横一文字に引かれた赤い模様。年の頃は17、8のように見える狼のような青年は全身から血を流していた。

「チツ、あの巨人共が……」

大怪我の理由は彼の狩り場とする“いかれる巨人の原野”に徘徊する“サイクロプス”と言う怪物の猛攻によるものだ。棍棒でめつために打たれた肉体は歩くのがやっとの状態だった。

「次会ったときは……皆殺しにしてやる」

憎悪を呪詛のように吐き出した青年はゆっくりと洞窟内を歩いていった。

「ガッ!？」

次の瞬間、青年の体が前につんのめり顔面から地に沈む。端的に言えば石に躓いたのだ。

「痛えぞこのクソ石ころガアアアアアア!！」

そしてこのキレようである。ただ躓いた、その原因となっただけでその石は青年の暴言を長々とぶつけられることとなった。

「チツ……アアツ!クソ!クソ!クソ!クソが!」

流石に虚しさを感じたのか、青年はゆっくりと悪態をつきながら再び足を引きずって歩いていった。

地下の三階。太陽の光が届かぬ其処には小さな小屋がぼつりと建っていた。

「よっこらっしっ……」

其処に先程の青年が骨付き肉と瓶に入れた水を持って座っていた。骨付き肉の一つを取り、大きく口を開いてかぶりついた。口に含んだそれは固く更には大味なため青年は顔を険しくする。

「……不味い、何でこの辺にはもうちつとマシな肉がないんだ？」

先程よりは幾らか静かだったが、青年は己の喰らう肉にすら悪態をついていた。

「つくつくつく……プハッ。まあ良い、ともかく明日は奴等に引導を渡してやるぜ」

全て胃に納めた後、瓶を取って水を一気に飲み干し、ニイと口元を歪める。そのまま寝を決め、近くにあった襪を引っ掴み、毛皮を敷いた床に寝ころがり意識を放した。

彼には記憶がない。生まれを知らない、育ちを知らない、家族を知らない、友を知らない、故郷を知らない。

そんな彼の知っていることは二つだけあった。

次の日の朝、天候は晴れ。彼は再び巨人の原野にいた。昨日と同じ毛皮を簀を着こんだ軽装。だがその腕には鋭いカギ爪を生やした武骨な籠手を装備していた。そして何より驚くことは、その肉体の傷が全て癒えていた事であった。その代わりに鼻の頭の赤い模様がまるで獣達を威圧するかのよう目立った。

「待つてるよ、デカ物共……」

そう言つてダツと駆け出し、原野の他の生物には目もくれず疾走した。目的の生き物はすぐ見つかった。己より二倍も大きいので意外な訳ではないが。目標を見つけた瞬間、青年は口を開き吠えた。

「デカ物！！昨日の借りを返しに来たぜ！！」

その言葉に巨人が振り向いた。一つ目のそれは頭に鉄の兜を被り、手には巨木をそのままへし折つたような棍棒を片手で握っていた。その目が青年を捉えんと動き始めたときには、既に懐にいた。

「遅えよデカ物！」

青年が吠え、カギ爪を巨体の腹に突き刺す。赤い鮮血が迸る。

「ゴオツ！？ガアツ！！」

サイクロプスは痛みに顔を顰め怯みをみせたが、すぐに棍棒を振り回し追撃を防いだ。

「ハッ！当たるかボケがあ！！」

だがただ振り回すだけの攻撃程度では彼の前には防御にもならず、

今度は脇腹にカギ爪を振り抜き五つの刃物傷を作った。

「オラオラア！！どうしたどうした！！」

切り裂き、貫き、抉り、引つ掻き斬る。よろりとふらめければ一気に斬り込まれ、反撃しても当たらない。怒ったサイクロプスは乾坤一擲の勝負に出た。棍棒を両手で持ち高く振り上げる。

「ガアアア！！」

青年の脳天に目掛けて真つ直ぐに降り下ろされる棍棒。全体重をかけた一撃は先程までの乱雑な攻撃とは違い、必殺の意思が籠められたそれは避けることができないほど速かった。だが青年は慌てず左手を前に構え、右手を後ろに引き深呼吸した。

彼の覚えていることはたった二つ、その一つが彼に刻み込まれた戦いの経験、そして己の奥義。

「ドリルパンチ！！」

その掛け声と共に左手を引き、後ろに引いていた右手をドリルの様に回転させながら降り下ろされる棍棒にぶつける。螺旋を描く拳は、いとも容易く木製の大量を文字通り木っ端微塵にする。

「ガッ！？」

目の前の光景に驚愕するサイクロプス。だが青年の攻撃は未だ終わっていないかった。

完全に右手を振り抜いたあと、右足に力を入れ、思い切り跳び上がる。そのまま引いた左手で跳び上がりざまに顔を割り貫いた。その一撃にとうとう巨人は事切れ、その巨体を地に伏させた。

「チツ、もう死んだか。他愛ねえ」

だが青年の心に一切の達成感などなかった。寧ろ怒りを完全にぶつけられて無かった分、更に彼の憤怒は加速した。

「この程度の奴等が群れただけでオレは負けたのか……アアツ！クソがあー！！」

怒りのまま原野を突き進み更に巨木を捜す。

「この“ぶちぎれファンギル”様に齒向かったこと……徹底的に後悔させてやらアー！！」

彼の知っていることは二つだけ、戦いの経験と憤怒を刻まれた己の名の二つ。

故に彼は己の気性、怒りのままに突き進む。

これは“勇気の邪悪”に支配されたダークヒーロー“ぶちぎれファンギル”の一幕。

吉（後書き）

ハイ、新小説出しました。出来れば宜しくお願いします。

式（前書き）

世界なんざ狭えもんだ、例え世界の広さを知ったとしてもな。

貳

巨人の原野。未だそこでは茶の狼による怪物狩りが行われていた。

「オラオラオラヨオ!!!」

狼の両爪より放たれる斬撃に巨体が血飛沫を上げ崩れる。倒れ伏した“それ”の体液を浴びながら狼、ぶちぎれファンギルは息切れして佇んでいた。

「チツ、デカ物共があ……………」

その身には無数の打撲痕がまざまざと刻まれており、身に付けていた毛皮もボロボロに破れ、ぼたぼたと流れるサイクロプスの返り血の赤に混ざり、ファンギル自身の赤も滴っていた。昨日より大したことはないとしても、大怪我であることに変わりはないのだがファンギルは別のことに苛立っていた。

「まだ五匹程度しか狩れてねえじゃねえか……………畜生が」

それは己の成果の低さ。だがそんな彼に吠えている時間はなかった。理由は簡単、手負いの状態で敵地にいること、それがどれ程危険なことか、幾度も戦いを続けている狼で無くとも理解できることだった。そう考えていた時

『ゴオオオ!!!』

大勢のサイクロプスの怒号が原野中に響き、その大群の行進による震動がファンギルに近づいてきた。

「チツ！来たか！」

ファンギルは大きく舌打ちして顔を顰めた。恐らく大群を率いているのは親玉、最強の巨人だろうと考えたからだ。こちらは手負い。怒りのまま戦うサイクロプスであれば倒すのは赤子の手を擦る程度なのだが、ついさっき倒した巨人の攻撃は一線を画していた。要は強いのだ。

考えられる理由は巨人の親玉の縄張り、その枢要に近づきつつあるため。これしかなかった。外来種の存在はファンギルの中で否定されている。原野の最東端、ファンギルがねぐらとする“勇気の洞窟”より向こうは一面の銀世界、所謂雪原が広がっているからだ。

ファンギルは一度其処に足を踏み入れたが、獣が数種類いるのみで巨人の姿は確認できなかったからだ。

ならば最西端はどうか、これまた其処から外来種の来る可能性は無かった。雲を突き抜ける巨大な岩山がまるで世界を区切るかのよう

に、連なっているからだ。

「さて、どう逃げるか……」

しかしその様なこの世界の地理など生死の瀬戸際に立つファンギルにとって至極どうでも良いことであった。まず、どう切り抜けるか其処にファンギルの焦点はあった。

「本当ならば潰してやりてえが……」

ギリギリと歯軋りし、震動のする方から背を向けダツと走り出した。手負いとはいえ、この狼の脚力は早早崩れるものではなかった。原野を駆け、巨人達から姿を隠すため入った森、“シラカンバ”を突っ切らんとする。

と、ファンギルの前に偶然其処にいたサイクロプスが道を遮る。

「こんな時にかよ！」

闘えば後続に見つかる確率が上がり、闘わねばこの巨体で追い縋ってくる。そんな相手を前に狼は走る足を止めず、巨人の持つ棍棒がギリギリ届かない位置で、跳ねた。

「ゴオ？」

目の前から突如消えた獲物を見つけようと左右を向くが、姿を捉えられない。サイクロプスが諦めた頃、ファンギルは聳える木々の枝から枝へ跳び続けていた。

ファンギルの最も誇る点はその跳躍力、己の3〜4倍程の高さを持つ障害物を難なく飛び越える足のバネにあった。そのまま森を抜け出し己の拠点たる洞窟にラストスパートをかけた。

「奴ら……」

そんな中でもファンギルの思考は次なる闘いと巨人たちへの怒りだった。

「この俺を二度も虚仮にしゃがって……クソ共があー！」

傷は痛む、だが何より怒りが勝る。怒りの一念で痛みを無視し、地下まで走りきり小屋についた所で床に突っ伏した。

「……………」

数秒の沈黙のあと、寝息が洞窟に響く。一定のリズムを刻むそれを

BGMに狼の夜は更けていった。

これは巨人の原野の狼の、何時もの日常。

式（後書き）

今回は短めでした。
次はファンギルの一人称で書きます。

参(前書き)

狼の舞、魅せてやるよ。

「……………ん？」

唐突に眠りから覚め、目を開くと辺り一面に毛皮の海が広がっていた。何故？

昨日は家について……………。

記憶がねえ……………。

「あのまま寝ちまったってことか？」

それを証明するように空きつ腹から飯の催促音が響く。マジかよ、畜生。メシ喰ってねえじゃねえか……………！

「腹減ったぞ、クソがあ！！」

アア、イライラする！何で寝てんだよオレは！

棚に積まれた袋から肉を取り出し、胃を満たさんと腹に詰める。ブチブチブチッ！

口の中に固い肉の味が広がり眉が寄るのが己にも分かる。

「まつふあく、まずいつへんふあよ」

何時もの咀嚼作業を終わらせ、立ち上がる。怪我は……………よし全快してるな。昨日までの痛みが嘘見てえだ。

カギ爪を装着し、小屋から出て地上を目指す。

「さて……………今日も狩りに行くか……………」

口角がつり上がるのを止めることが出来ねえ。殺気が全身に漲つて
る感覚だ。

さあ、今日は何匹殺るか。そんなことを考えながら朝の日差しを目
一杯浴びた。

繰り返される棍棒の一撃を避け、カウンターで五本の斬撃を浴びせ
る。苦悶の表情を浮かべ、悶える巨人の頭部にトドメ。原野に巨体
の屍が並ぶ、並ぶ、並ぶ。何時も通り繰り返される日常の風景。

しかし……何でだ？満たされねえこの感じは。

「……………」

思わず無防備に手を降ろす。サイクロプスがないとは言え、此所
は敵地。昨日もこの状態で強い奴にいきなり殴りかかれ大怪我を
負ったと言うのに。それでも一度考え始めたら、意識を完全に己の
中に沈めて思案せねばならぬ程、オレの飢えは、渴きは、空虚は大
きかった。

何時からか此処にいて、毎日巨人と闘う。偶にカーチクを狩ったり
して、貯めておいた不味い肉で腹を満たす。

此れからもこんなクソみたいな環境で闘い続けるのがオレの定めな
のだろう。

いや、別に嫌なわけじゃねえ。確かに巨人共はムカつくし、不味い
肉もうんざりだ。だが住めば都、日の届かない洞窟も其処に拵えた
檻籠小屋もそれなりに愛着がある。

だが、しかし、やはり、それでも。

「この満たされなさは何だっただよ……畜生が！」

思わずその辺の石を蹴飛ばす。一直線に空に向かう石くれ。飛ぶ飛ぶ。

「さて、次はどうすつか」

石ころを見送ったあと、考えを振り払い辺りを警戒する。気を張り詰め、殺気を放つ。

「……真っ直ぐこっちに来るな……良いぜえ」

強い殺気は宣戦布告と同義だ。オレの殺気が届いたように、直ぐ様巨人の咆哮が原野に響き渡り震動がこっちに向かってくる。オレの方に殺気を放ちながら。

「さあ来い、皆殺しにしてやるぜエー！」

金属製のカギ爪を鳴らし、気を高める。殲滅の時間の始まりだぜ、デカ物共。バラバラのケチヨンケチヨンになりやがれ！

闘いは直ぐやって来た。目の前には四つの巨体、その一匹一匹がギラギラとした眼をこちらに向け、威圧するかのように棍棒を掲げている。更に一番奥の巨人は他のサイクロプスと違い、より強い装備をつけ、如何にも言うようにふんぞり返ってオレを見据えていた。

腹立つぜえ……ぶち殺す！！

一段と濃くなつた殺気にサイクロプスが中てられたのを皮切りに、殺し合いは始まつた。

二体のサイクロプスが棍棒を振りかぶつた瞬間、地を蹴り後ろに跳ぶ。目標を失つた質量はそのまま地を抉る。其処は先程までオレがいた場所であり、避けてなければミンチが出来ていた事だろう。とそんなことを考える暇なく今度は岩が飛んできた。その辺一体にある適当な岩をぶん投げてきたようだ。しかしコイツら……！！

「んなモンでオレを殺せると思つてやがんのか！舐めんな！」

そんな石くれに潰されるほど鈍くねえ！

ダツと駆け出し投擲された岩と地面の間をすり抜け、相手に接近していく。己が投げた岩に向かつてわざわざ潰れにいったバカな狼。と判断し、オレの行動に油断した巨人共は大きく眼を剥いて体を強張らせた。ならよ！

「グツグガアアアア！！漲ってきたアア！！」

近くにいる一体の目の前まで跳び上がり咆哮と共に一撃を繰り出す。くたばりやがれ！

「ドリルジャブ！」

顔面に螺旋状の疵を作られ、地に臥す巨体。未だ衝撃から覚めぬ隣の巨人に螺旋の拳を見舞う。

「オラよッ！」

『グアアッ……！！？』

グラリと蹠跟めき、ズウンと音をたてて崩れ落ちる巨人。その様を見て残りの巨人共も漸く驚愕から覚める。

『グガアアアア！！』

途端、目に入る惨状。二体の同胞を倒され、怒りに吠えるサイクロプス。ちなみにオレの長年の考察では、どうも此処の生物の怒りの沸点は揃いも揃って低いようだ。まあ、そいつは大型の捕食者のみに限られたことで、被補食側はそんなこと無いんだがな。

『ガアツ！グルアツ！』

照準の合わぬ棍棒を振り回し、無駄に体力を使うサイクロプス。喰らうか、バーカ。

「フン、せりヤツ！！」

棍棒を叩きつけるのに合わせ、無防備になった所へ顔面に連撃。ちなみにこの巨人の弱点が頭部だと知ったのは、つい昨日だったりする。

「ハアツハアツ……さて、後はテメエだけだな」

倒れ臥す三体の巨人の屍を肩で息をしながら踏み越え、サイクロプスのボスを見上げる。

「覚悟しな、デカ物！！」

『ゴガアアアア！！』

参（後書き）

今回は予告通り一人称です。ファンギルの怒りっぽさを感じていた
だけたら幸いです。恐らく次回も一人称です。

肆（前書き）

答えは火事場の馬鹿力。

肆

脳天に垂直に降り下ろされる質量。今まで会ったサイクロプスの比ではない速さ、もしオレが気合いを入れ直していなかったら、ぺちやんこに潰れていただろう。荒れた息のまま、棍棒の攻撃を転がるように避け、

息を整えようと、再び転がって体勢を立て直し後ろに跳ぶ。

一度の跳躍で約2メートル。それを二、三度繰り返し、5メートル程の間を開けて対峙する。

改めて見りゃ、今までの奴等と違うことが分かる。まあ、うまくは言えねえが。元々語彙も豊富じゃねえしな。

と、考え事をしていると対峙中のサイクロプスが、棍棒を握ってねえ左手をオレの方に向け、その指を一本だけ立て、クイクイと振る。紛れもない挑発………ざけんなア！

「舐めやがってエー!!」

力強く地面を蹴り、一気に駆ける。刹那程の間で距離を詰め力ギ爪を煌めかせる。

相手はそれに対し、迎撃の棍棒を振ってくるが、予想通りだ。

体を地に伏して転がり、目標を失った棍棒の一撃が荒地の地表を押し潰す。

地に衝撃が走る、それから間を置かず足に力を入れて跳び上がり、右腕を肩よりも後ろに引きつつ巨体の頭部に迫る。

「終わりだ!!」

勝ちを確信し、吠え猛り螺旋を描く右の力ギ爪をぶつける。

その一撃は、兜に突き刺さった。しかしその爪は食い込む事なく、

弾かれた。

「なん……だと……!?!」

装備のレベルがここまで他と違うのかよ。

そう毒づく暇なく、巨人の左手が拳骨を象りオレの腹部を殴り付けた。いや、殴り付けるなんてレベルじゃねえ。上手くは言えねえが取り敢えず一線を画していた。だから語彙は貧弱なんだよ!語り部に向いてないとか言うな!!

「グツフ……ガツ……ウオオオア!!」

地に叩きつけられ其処からバウンド。跳ねる、跳ねる、跳ねる。

「グツ!!」

三度目で漸く巨大な岩にぶつかり、ずるずると地につく。空中と大地を往き来する動作は終了したようだが……いや、痛エぞ。何度もぶつかるのが終わったってだけでこの岩にぶつかった衝撃が一番応えてんだからな。

『ゴツガアアア!!』

勝ち誇ったように天に向かって咆哮するサイクロプス。どうやら動かぬオレを見て死んだと思ってやがるようだ。

「ギョ……けん、なア……」

デメエごときに、殺られるオレじゃねえんだよ。

「この雑魚がア！！」

大声を張り上げ、立ち上がる。すげー痛エ。内臓が少し傷んでんのか、口からドバツと血が吐き出される。幸い四肢は其処までダメーシはなく、思い通りに動く。

「おら来いや！ぶちのめしてやる！！」

『ガアアアア！！』

一撃で仕留められなかったことに怒ったのか、挑発されたことにプライドを傷つけられたか、血走った目でこちらを睨み付け、走り来るサイクロプス。巨岩が猛スピードで駆けるような光景に冷や汗が頬を伝う。

勿論それを拭う暇なく、巨人の振るう棍棒が身に迫る。

「ッシヨ！！」

满身創痍の身を左に駆動させ、すぐ側で質量が通り過ぎた事に目もくれず、再び頭部に向かって跳んだ。何故跳んだか、それは攻撃が弾かれた後、吹き飛ばされる寸前に見たからだ。

その兜に、小さなヒビが入ったのを。

「グッグガアアア！！」

再び吠えるオレ。今度は、今度こそ、

「貫かれなア！！」

両の腕が螺旋を作り、回転を始める。そのまま二つの掘削爪を、そ

の兜のヒビ目掛けて振り下ろした。

「ドリルツインパンチ!!」

二つの螺旋。その二撃は、兜を刳り貫き、頭蓋を刳り貫き、血を噴き出させた。

『グルツ……ガア……』

巨体が大地に臥され、地響きが辺りに唸る。

「ゼーエー、ハーアー………勝った、か」

今までの蓄積された疲労が一気に噴き出したように倦怠が肉体を支配し、ドサリとその場に座り込んだ。

「動けねえ………まあ、当然か」

こんな時に巨人が来たらまずいな。
そう思った矢先、サイクロプスの重量感のある足音がこちらに向かって来た。

「……ハア!？」

何でこんな時に!？畜生がア!!

洞窟。

なんとか逃げ切ったオレはおれ自身を訝しんでいた。

「何で逃げ切れたんだ？」

答えは何時までも出なかったため、何時ものように床に伏して、眠りに身を投じた。

肆（後書き）

次回も宜しくです。

伍（前書き）

白が、赤く。

伍

さて、ここで物語は再び三人称となり、話の主人公は一度狼から外れる。理由は実に単純明快。この世界、“リバース・ワールド”にはぶちぎれファンギルと同列、同格、同等、同程度の存在が彼を含め十三体いるためだ。彼等は各々邪悪に縛られこの世界に存在する。永劫不変である邪悪は、己の支配下にある者を個人差はあるものの記憶を消去している。

「……………様……………」

今回の物語はその縛られしダークヒーローが一人、水の人魚の寝言から始まる。

カン、カン、カン。

透き通る水晶の様にキラキラと輝く階段を、一段一段降りる音が空間に響く。どこかの王族の様な気品を感じさせる足取りで階段を降りきった彼女は、そのまま門のところまで歩き、外に出る。

「いつも通りの吹雪ね」

瑞々しい唇が紡ぐ言葉は天候の確認。一面に広がる雪の原、“けがれし涙の雪原”を領域とする“みだらなフィーナ”の呟きだった。

「さてと、アレがちゃんと稼働してるか見に行かないとね」

黒いマントを翻し、立て掛けてある長槍を手に取り、その吹雪の中に入っていく。

ザツザツザツ。

積もりに積もった深い雪の中を少女が進む。

水色の透き通る鱗のようなパーツのついたカチューシャ。黒いマントを羽織ってはいるが、その下はぶかぶかの水色セーター一枚。それしか臀部を覆う物はなく、いわゆる“はいてない”である。脚部は薄い黒ニーハイソックスに包まれ、履く靴にもカチューシャ部と同じ鱗飾りが踵についている。全体的に水色の人魚を感じさせる少女。

誰がどう見ても雪国暮らしの服装でないと思われる装備を着ているが、本人は吹雪などまさしくどこ吹く風である。

と、フィーナの前に獣の姿が映る。

鹿のように伸びた双角。もももこと分厚い毛皮で覆われた体はもぞもぞと蠢き、よく見れば仔の姿がちらほらと現れる。

獣の名はペッコラ。仔の名はペッコラコ。

「厄介ね……」

獣を視認した瞬間、露骨に嫌な顔をするフィーナ。

仔の方には何の危険性もない。むしろ余りに弱いのでちょっとしたことで絶命してしまう。故に親であるペッコラの体に引っ付いているのだが、そのペッコラが問題だ。

「……………」

「……………」

暫し距離を置いて睨み合い。

(……………ビークスやバズズー辺りならなあ)

迷わず攻撃に移るだろうと。

現在別行動中の仲間の事を考えながら、手に持つ長槍に少し力を込める。気取られないよう細心の注意を持って、威嚇でなく、万一のための予備程度で。

「クルルルツ」

「……………ふうっ」

幸い人魚の心配は杞憂に終わった。

ペッコラは一鳴きしてぴよこぴよここと小刻みに跳び跳ねていった。

「良かった……………」

服が破れるのは嫌だしね、そう思いながら、五分後。

「ギャシャアアアア!!」

「何がどうしたの!?!」

彼女の心配は本物となった。

そこにいたのは脳天からぱっくりと裂け、くりくりとした目玉を真っ赤に血走らせた獣、ペッコラ。

それが裂けた脳天から牙を剥き出しとし、先程の穏やかな外見の面

影を完全に消し去っていた。

「さっきの……じゃないみたいね」

獣の周囲を見渡し、おっかなびつくり言葉を紡ぐ。

ペッコラのこの形態になる条件は、仔の死亡。親として仔を守れなかった時のみ。その時には雪原の王や究極竜にすら向かっていく。だが辺りにはその死骸は存在しなかった。

戦えないことはないんだけどな。

ぼそりとフィーナが口に出す。

服が破れるのは嫌だけど。

戦わない理由にはならない、戦おうと思わない理由にはならない、戦えない理由にはならない。

長槍を投擲するように上段に構える。瞋を上げ、目を鋭くする。意を決したように深呼吸を一つ。

「ギヤシャアアア!!!」

その威嚇にしか見えない動作に、ペッコラは体を真二つに割らん程のばつくり裂けた口を向ける。

「やるの？なら殺りあいましょ、哭かせてあげるわ」

口元が微笑を湛える。愛らしい、笑み。とてもこれから目の前の獣を狩り殺そうと言う顔ではなかった。

「ギギギギガガガ!!!」

ガチガチと並びの悪い牙を鳴らし、雪上を掻くように進み少女に迫る獣。

その獣を前に、フィーナは、垂直に跳び跳ねた。ペッコラと違い、とても高く。

「プリーズプリーズ！」

投擲の構えのまま、槍の尖端から水色の光が迸る。その光は二つに割れ、その大口の上顎と下顎に突き刺さり、突き抜け、その光が氷晶に変わり地面に固定する。

「ギヤアアアアア!!？」

「あら、予想外にイイ声」

ストツと降りてきたフィーナが浮かべるのは恍惚の笑み。蕩けんほどの目。

根っからの加虐性愛を持つフィーナの全身に快感が走る。

屈伏。悲鳴。屈辱。

相手のその全てが人魚を笑ませる。

「あっさり、ね。ゴメンね、ソナッチヤカラパシ辺りなら命までは取らないけど」

私だから。

そう言って、槍を口腔に突き刺し、薙いだ。

ザッザッザッ。

積もりに積もった深い雪の中を少女が進む。

右手に赤に染まった槍を担ぎ、左手に赤に染まった収獲を担いで。

「……………へ？」

と、彼女の足が不意に止まる。

身の丈程もある氷塊が彼女の目の前一杯に映る。別に邪魔と言わ
けでなく、ただ横を通れば済むだけの話だが、彼女の視線は、氷塊
の中。凍える茶の狼に釘付けだった。

伍（後書き）

疑問ですがパタポンのやりポンやヤリーダって投げた槍をどう回収してるんでしょうね？分からなかったので、御伏四の世界（略して御伏世）では投擲の構えをとると槍状のエネルギー波が出る。と言うことになっておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8114y/>

It's nice to meet you Reverse World!

2011年12月29日05時52分発行